

4 . 蛭川 杵振り祭

蛭川村は平成の合併で中津川市となったが、山と川に囲まれた過疎ではあるが美しい山里だ。同時に中津川市は、島崎藤村「夜明け前」の舞台となった信州馬籠を含む山口地区を長野県から岐阜県へ越境合併し名を馳せた。夜明け前の主人公、馬籠宿庄屋青山半蔵は平田篤胤の国学に心酔し王政復古を夢見る。そういう土地柄でもあり、この地は南朝の足跡や、明治期の廃仏毀釈の影響が色濃く残っている。そういった風土の中に安弘見（あびろみ）神社と杵振り祭はある。

蛭川と私との縁について少々述べる。ヒトツバタゴという5月中頃咲く花がある。あわ雪を置いたように真っ白な花で覆われる美しい樹木で、蛭川と犬山がその名所だった。木曾川水系にしか自生しないとわれ、当時の林村長と私とで主導し、ヒトツバタゴ・サミットを企画した。

又、犬山祭に使う草鞋を作ってくれるのが

鷺見（すみ）米二さんという樵のような猟師のような生活をするこの地の古老である。

4月19日祭の日、犬山祭の関係者数人で鷺見さん宅にお邪魔した。煤けた作業場に囲炉裏が切っており燠（おき）がくすぶるセピア色の空間だった。タケノコ、ワラビを前菜に、大量の猪肉を焼き、自家製の濁酒（どぶろく）を飲み、この土地の由来と風習を聞いた。どこの祭でもそうだが、半日やそこらで全貌を見ることはとてもできない。祭のすそ野は広く、こういった祭礼以外の場で土地の人の歓待を受けるのも祭の一部には違いないし、祭を行う地元の人が自宅を開放し、誰かれなくよそ者を飲食でもてなし歓待する事が、祭に内在する浪費の快樂でもある。都会の祭にはそういった風潮がだんだん薄くなり、金を払って商品を買うだけになるのは祭の多様性を見逃す。

濁酒の酔いが回り陶然としながら、小降りの春雨に湿った祭囃子の太鼓に引っ張られる

ように安弘見神社へ出かけた。神社前の広場で一団の子供たちが囃子に合わせ杵振り踊りを踊っていた。装束がとても面白い。頭に鮮やかな赤・青・黄の紙製のデフォルメされた白をかぶり、手には杵を持つ。なんだか前衛芸術のような斬新なデザインと踊りにすら、私には見えた。次に子供たちに代わって厄歳を迎えた男子と聞いたが、天狗、おかめ、ひよとこ、蠅追いなどの行列が踊りながら見物人をかき分け本殿への長い階段を上っていく。祭囃子は登りと降りの2種類ある。そろそろ広場と本殿への階段は人で埋まる。

クライマックスは花馬の登場で達する。神が馬に乗って登場する祭は多々ある。馬が本殿への階段を上がる時、背負った花を見物客が取り合う。馬にも神が乗り移るかもしれないが、回りに揉みくちやにされる馬にしてみたらこれは手荒い神事だという気がした。

東濃の山々が春の息吹を生じるこの季節、長閑な郷の祭であった。